

高校生が社会を知る意義

— 体験的学習にはどんな効果があるのか? —

文／荒尾貴正（本誌編集デスク）

「高校生が高校にいるあいだに、社会を知る必要性はあるだろうか?」

そんな疑問をもつ人もいる。

「いずれ、もちろん高校生たちも社会に出て、さまざまな現実を知る。その前に『社会を見せる』必要はないのではないか? そんな時間があるのなら、勉強やスポーツや部活動に費やすほうが有効ではないか——」

そついった声が高校現場でも少なくないといわれる。そのような声に対して、ここであらためて高校生が社会を知ることの意義を考えてみたい。高校においてインターンシップやさまざまな体験的な学習を行うことはわざわざやる価値のないことなのだろうか? 小誌は4つの意義があると考えている。

意義① 将来の「種」ができる

東

東京都立川市に「たちかわ若者サポートステーション」(以下、サポステ)がある。サポステはおおむね15〜39歳のニート状態の若者の職業的自立を支援する組織だが、全国に約150カ所あるサポステのうち(13年4月現在)、「たちかわサポステ」の進

路決定者数は全国平均の倍以上。その実績から、所長の井村良英氏は「日本一ひきこもりを就職させる男」ともいわれる。井村所長は、高校生が社会を知ることの意義をこのように語る。

「中学校や高校でインターンシップや職業人と触れあう体験をしたことのある人は、何となく職業イメージができていて、それが『種』となって再チャレンジのきっかけになることが多いです。逆にその種がないと、自立までにものすごく時間がかかります。若者の自立支援をしていて、日頃からそういうこととは感じますね」

その時は目立った変化がないとしても、将来に非常に大きな影響を及ぼす体験となる可能性は高いのだ。

意義② 向いていないものがわかる

自

分に「向いているもの」を探すのは難しい。自分に「向いているもの」を特定することは、なお難しい。誰もが業績を認める著名人のなかに、「自分が何に向いているのか、いまだにわからない」という人もいる。人生は、「自分が向いているもの」を探す旅だと

いう人もいる。ところが、「向いていないものは瞬時にわかる。いくら頭の中で医師になる自分を想像していても、血を見た途端に倒れる人がいる。アパレルショップの店員にあこがれていても、やってみたら、「自分の仕事ではない」と直感する人がいる。向いているか向いていないかを知るには、やってみるのが一番早い。実際にやるのが無理であれば、見たり、やっている人に話を聞くだけでもずいぶん違う。そのような体験をした後に進路を決めていくほうが、「やっぱり向いていなかった」と後悔することが少なくなることは間違いない。

意義③ 受験をもって 自信を臨める

実 際に体験したことは言葉にしや
すが、体験しないことを伝える
には、誰かの表現を借りてこなければな

らない。そういうやりかたではなかなか通用しないのが、面接や小論文だ。

例えば医療系受験は、面接や小論文が課されることが多くなった。入試までに現場を見たり、体験したり、それをもとに対話をして問題意識を高めておかないと、面接や小論文の中身が乏しく、合格もおぼつかない。だから、医療機関での体験学習は必須だ。同様に、面接が課される受験に関しては、現場を体験しておくに越したことはない。もちろん面接の有無にかかわらず、現場を体験することは、モチベーションを高めるうえで重要である。

意義④ 教員が 楽しい

教 員にとってはどうだろうか。
神奈川県立大師高校で昨年初
めてクラス担任となり、初めて「産業

社会と人間」を担当した石山喜章先生は、1年間の授業を振り返って次のように語る。

「率直に言って、すごく楽しかったです。外部のさまざまな人との交流は、民間経験のない私にとって発見の連続でした。いつも私がウキウキしているので、生徒も『何か楽しそうなおことやってるな』と首を突っ込んでくる。そんな感じで毎回の授業が進んでいきました。生徒よりも、もしかしたら私のほうが楽しんでいたらかもしれません」

体験的学習を負担に感じるのではなく、教員個人として発見の喜びに満ちている先生も多い。楽しさはさらに教員自身の成長につながっているとも聞く。

以上、4つの意義を挙げてみたが、さらに多くの意義がありそうだと、多くの読者は思われたのではないだろうか。

次ページからの事例をお読みいただき、その実践方法だけでなく、先生方が走りながら見つけてきた、生徒にとっての意義、教員にとっての意義、そして、社会にとっての意義を、読者の先生方も共有していただければと思う。

